

9 保育所における、発達が気になる子に対する支援力向上の取り組みについて

秩父学園 地域支援課 地域療育支援室 村上功二 杉本拓哉 田中里実 大門亜希子 星美弥子

【はじめに】現在、全国の児童発達支援センター等が、保育所等訪問事業を担っているが、その頻度は十分であるとは言えず、また、対象児の増加や状況改善に係る期間の長期化などの問題にも直面している。そこで、秩父学園において、全国へのモデル発信を目的に、1.保育所へのシステム化された効率的なコンサルテーション、2.秩父学園通園療育を利用した実践研修という2つの方法を通して保育士の支援力向上を試みた。その結果、保育士、保育所全体として子どもの気になる行動に取り組む姿勢に変化が見られたため、その経過を報告する。

【対象】1.保育所を管轄するX市保育幼稚園課と協議し、X市より推薦があった9つの保育所を対象とした。2.X市公立保育園から公募で募った保育士を対象とした。

【方法】1.スタッフによる対象児の訪問・観察、報告・システム化した支援シートを使用して行う保育士によるケース検討のコンサルテーションを2か月に1回程実施した。訪問スタッフはX市保育幼稚園課、児童発達支援センター、秩父学園の3機関で構成。報告・コンサルテーション後毎回アンケートを実施し、支援内容の変化、専門性向上の度合いについて考察した。2.秩父学園で実施している通常療育の集団活動場面を中心に実践の機会を設け、その他に教材作成、反省会への参加、行動分析シートの記入などを実施した。

【結果】1.アンケート結果から「他の視点から客観的に説明を受けることで、新たに気づくことがいくつもあった」「自分の対応に自信が持てた」「園全体で一人のお子さんについて検討する機会を持ててよかった」といった回答が多く見られた。一方で「使用された言葉が専門的で難しい」という回答も散見された。観察時の様子からは、4回の報告をする毎にクラスを超えて一貫性のある対応が見られたり、クラス内での保育士の役割が明確になったりするなどの変化が見られた。2.実践研修に参加された保育士から、「方略を持って支援に臨むことで、子どもの自立度の変化が明確に整理・理解できた」「子どもの気持ちや行動を客観的に捉えることで、その子の立場になって振り返ることができた」といった回答が多く得られた。

【考察】1.単発での観察・報告・相談ではなく、システム化された支援シートを使用し、継続して保育士に主体となって実践してもらうという取り組みが有効であることが示唆される。また、対象ケース以外のお子さんへの対応にも変化が見られ保育環境が改善されるなど、保育所全体で一人のケースについて検討・情報の共有をすることの重要性も伺われる。

2.「児童発達支援センターで実施されているプログラムに準じた活動を提供すること」「行動分析シートを使用して客観的に子どもの気持ちや状態像を把握すること」「事前の環境設定・直接対応・次の環境や対応を見直し反復して実習すること」で、参加した保育士が子どもの変化を実感し、所属する保育所でも支援力を向上させることにつながったと考えられる。今後は短大や大学のカリキュラムの中に、施設実習だけでなく、実践的技術獲得のための講義（実習）の整備が求められる。